

途上国における貧困と教育

－インド・ウツタルプラデシュ州A市の若者聞き取り調査から－

佐々木 宏

広島大学大学院総合科学研究科

Poverty and School Education in Developing Countries ;Analysis of interviews with youth in a provincial city of Northern India

SASAKI Hiroshi

Studies of Civilization and Society,
Graduate School of Integrated Art and Sciences

Abstract

Focusing on class disadvantages in relation to conditions for the development of children born and raised in impoverished families in developing countries, and on disadvantages related to education particular, this paper sought to generally outline the framework by which disadvantages are formed in the process of a child's growth. To that end, an interview survey of 16 youth of different classes was conducted in 2006 in a provincial city in the Indian state of Uttar Pradesh and comparison of the life histories and current living conditions of the interviewed youth was attempted. Results revealed two points. First, children of impoverished families were found to suffer various disadvantages throughout their lives, from a young age to adolescence, in comparison to children of wealthy families. In addition, disadvantages for such children of impoverished families were found to be severely affected and formed by not just a dearth of resources in terms of the family's financial, cultural, and social relationships but also by societal context (production system, labor market, educational and other systems, etc.).

序－子どもの『育ちの不平等』への関心

本稿では2006年にインド・ウツタルプラデシュ(U P)州の地方都市(A市)でおこなった若者聞き取り調査(2006年調査)の結果を報告する。調査では、異なる学校経験を持つ若者たちの生活史、現在の生活、将来展望などを聞き取った。異なる

学校経験とは、どの程度の教育段階まで進んだか、どのような種類の学校に通ったか、といった学校歴の違いのことである。A市には様々な学校が初等教育から乱立し、親たちが自由に学校を選択している。また、学校に行かせない親も少なくない。このことは朝の風景をみただけでもあからさまにみえてくる。様々な制服をきた子どもたちが、バ

ス、自転車、徒歩でそれぞれの学校に通っている。また、多くの働く子どもたちもいる。A市ではきわめてバリエーションに富んだ子どもの育ちの姿をみることができる。ここでは、こうした多様な子どもの育ちの比較を試みたい。

実は、ここで報告する2006年調査は、筆者が1998年からA市で続けてきたフィールドワークのなかにある。A市でのフィールドワークは一貫して子どもの「育ちの不等」に関心をおいてすすめてきた。「育ちの不等」とは、子どもが育っていく条件が家族によって異なること、社会全体を俯瞰していうと子どもの発達条件の階級・階層の格差のことを意味している。この点について、近年、世界銀行が刊行した『世界開発報告2006』の序に印象的なエピソードがあげられている。南アフリカで同じ日に生まれた二人の子どものエピソードである。ピーターは首都の豊かな白人家族で生まれた男の子、ヌタビセンは農村の貧しい黒人家族で生まれた女の子である。二人が育っていく条件は著しく異なる。ヌタビセンはピーターに比べて、健康に恵まれず、少ない教育しか受けられない。また市場での信用力や政治的な場での権限においてもヌタビセンは明らかに不利であるという。このエピソードから始まる『世界開発報告2006』は、途上国の人々の間にある様々な側面での格差を豊富なデータを使って紹介している。このような格差は社会的公正という規範からみてもフェアとはいえないし、結果として貧困の世代的再生産も懸念されるので、是正すべき不平等とみなすというのが『世界開発報告』の問題意識である。[World Bank 2005]

A市でのフィールドワークはこのような問題意識を背景に、とくに教育の不等に焦点をあててきた。先進国、途上国に関わらず、教育は子どもの将来に関わる重要なライフチャンスであるが、教育のチャンスは一般に格差をもって分配される傾向がある。このことは途上国の場合、かなり明白な事実として知られている。地域、性別、所属する社会集団、家族の経済状態に応じて、受ける教育に格差がみられることは常識といってもよい。国単位の研究は枚挙に暇がないが、同一のデータベースを使って途上諸国（35カ国）における教育

達成度と経済的階層の関係性を検証したフィルマーらの研究を参照すると、すべての国において教育達成度の格差が確認されている [Filmer and Pritchett1999]。また、学力、教育への意欲、また学校外での教育環境（たとえば、塾や家庭内での教育など）についての不平等について触れる研究も少なくない。ここでいう教育の不平等とは、子どもをとりまく文化的な資源・資本の不平等のことを指している。

育ちの不平等、とりわけ教育に関わる条件の不平等に関心をおいた場合、先行研究をふまえて深める必要のある課題がいくつかあるように思う。途上国の教育の不平等をめぐる研究課題については別稿でまとめてあるが、大きくは二つの課題がある [佐々木2006]。まずは、教育について階層的な不平等があることは周知の事実にしても、計測された不平等のその後にまで踏み込んだ研究はそう多くないということである。具体的にいえば、貧困家族の子どもが教育について様々な不利を抱えているとして、その不利が子どもの生活や将来にどのような影響を与えているのか（おそらくはネガティブなものであろうが）について、あまり多くのことが明らかにされていないということである。ある時点での不平等は比較的是っきりしているものの、その不平等を子どもの育ちのプロセスのなかでダイナミックに分析するという点において課題があるといってもよい。もう一つの課題は、これまでの研究はどちらかという一般的な次元で議論をすすめていた、別の言い方をすると各国や各地域の事情を織り込んだ議論が少ないことである。たとえば、教育達成度は先進国、途上国に関わらず子どもの育ちに影響を与える条件であることは間違いないが、大卒資格を持つことや「字が読めない」ことの意味はかなり相対的・文脈依存的なものである。また学校や教育制度のありようも各国や各地域において相当のバリエーションがある。国際比較や量的分析などでは捨象せざるを得ない面もあるが、不平等のなかにある子どもの育ちの実相に迫るためには、同時に特定のフィールドの状況を織り込んだ議論も必要となる。2006年調査は以上のような研究課題を意識して企画した。

ここで論文の構成を述べておく。まずは、次節(1節)で、「インド」「UP州」「A市」における貧困と教育をめぐる状況を概観する。引き続き(2節)2006年調査の概要を示し、3節から5節までで聞き取り事例を整理する。最後に(6節)ここで述べた問題意識に立ち戻り、A市における「育ちの不平等」の構造をラフスケッチし、まとめとしたい。

1. インドの貧困と教育

ドーアはかつてインドも含めた途上諸国について教育普及の遅れと学歴社会が並存しているという特徴を指摘した〔ドーア1978〕。インドの状況は今でも大きくは変わっていない。2004~2005年実施の第61回National Sample Survey (NSS)を参照すると、義務教育(5年制の小学校と3年制の中学校)対象年齢層の18%が不就学であり、中等教育(2年制の前期高校と2年制の後期高校)対象年齢層の就学率は45%、高等教育(大学・大学院)対象の年齢層の就学率は11%である〔NSSO2006:32〕。ここ20年ほどで特に初等教育普及は進んでいるが、先進国と比較すると未だ学校教育が十分に普及しているとはいえない。一方で学歴をめぐる激しい競争も続いている。

近年のインドの経済発展はIT産業や金融業等において多くの雇用を生み出しつつある。新しい職業は従来の職業に比べると待遇がよく、若者にとって魅力的な「良い仕事」が増加しつつあるといえる。しかし、労働市場全体から見ると今のところ「良い仕事」は求職者すべてを雇用できるほどの規模ではなく、依然として農業や伝統的小工業などが含まれるインフォーマルセクターが労働市場の中心を占めている¹⁾。ドーアが「大学卒バス車掌の発祥の国」〔ドーア1978:111〕と称した、高等教育を受けたにもかかわらず雑業や失業を強いられる若者が多いという状況は、大きくは変わっていない。

「良い仕事」へのアクセスは高学歴と英語能力が必須条件となっている。限られた「良い仕事」を多くの若者で取り合うという状況は、学歴資格をめぐる競争の激化とそのインフレを導く。フィ

ールドの印象からいっても、後進州の地方都市であるA市でも大学進学や英語検定試験のための予備校が急増し若者の人気を集めている。一方で大学院卒の露店主や失業者などにもしばしば出会う。統計的にみても高等教育進学者はドーアの時代よりも明らかに増加しているため、競争の裾野はかつてよりも広がっていると考えられる。さらに、ここ数年、特定のカーストや社会集団に対するアフーマティブアクション(進学枠や就職枠の割当制度:留保政策)に対する反対運動が大衆的に盛り上がっている。それらの多くは、留保政策がフェアな自由競争を阻害していると批判している。このことは学歴競争の裾野拡大と並行し、学歴競争を支える能力主義のイデオロギーが広く社会に浸透しつつあることを示唆している。

反-留保政策運動の盛り上がりを受けて、メリトクラシーの検証が現在のインドでは進んでいる。その多くは「良い仕事」や高等教育へのアクセスが性別、居住地、出身カースト、所得などに未だ強く規定されていることを示している〔Upadhyaya2007 Deshpande2006〕。結局、現在の高等教育は反-留保政策運動が想定しているようなフェアな環境にはないのだが、これは学校教育全体の傾向である。第61回NSSによると都市部の最貧層は非識字者が半数を占め、中等教育以上の学歴を持つ者は10%程度である。他方、富裕層の非識字者は2%に満たず、9割近くのもの中等教育以上の学歴を持っている〔NSSO 2006:27〕。このことは、どの程度の量の教育を受けたか、つまり教育達成度について階層的格差があることを意味する。フィルムラーらの研究を念頭におくと、途上国に共通する教育の階層化傾向といえるだろう。ただ、インドの場合その中身の違いにも着目する必要がある。

インドでは(州や地域によって違いはあるようだが)一般に初等教育ですら親の学校選択についての規制が弱く、選択の受け皿として私立学校が乱立している。学校選択や私立学校の存在は1990年代以降、研究者の関心を集めている〔Kingdon1996 押川1998〕。それらの研究は、質の高い教育を提供する高級私立学校から無償であるが質の悪い公立学校に至る、学校序列がみられること、

また、学校序列は地域の階層構造に対応していることを各地で指摘している。これが教育の階層化のもう一つの側面である。

A市の場合、特に二点目を無視することはできない。UP州はインドのなかでも私立学校への依存度が高いためである。第61回NSSによれば、5～29歳の就学者のなかで私立学校²⁾に通う者の割合は、インドの都市部の平均値は29.7%であるが、UP州都市部は46.9%である[NSSO 2006:90]。A市では2006年調査に先行して2001～2002年に小学校（義務教育の前半にあたる5年制の学校）を対象にした機関調査とそれぞれに通う子どもの家族のバックグラウンドを調べるための調査（2001年調査）を実施したことがある[Sasaki2004]。2001年調査では、A市の多様な学校群は大きく分けて、＜英語を教授語とする高級私立学校＞＜「現地語を教授語とする安価な私立学校」と「公立学校」＞に分類できること、家族の階層的な位置づけに応じて子どもは性格の異なる小学校に通う傾向があること（学校に通わない不就学者も少なからず存在する）が明らかになった。

上記のタイプ分けは学校認可の枠組みに対応している。後者はUP州政府が設置・認可している学校であるが、前者は州政府外の機関が認可している学校で、カリキュラム、教授語だけでなく、接続している中等教育修了試験（ボード試験）が異なる。UP州政府が設置・認可した学校では、州政府のボード試験に接続するカリキュラムが用意されている。それ以外の学校は、主としてCBSE（Central Board of Secondary Education）やICSE（Indian Certificate of Secondary Education Examination）/ISC（Indian School Certificate Examination）というボード試験に接続し、独自のカリキュラムを採用している。CBSEやICSEに接続する学校は一般に英語を教授語としている。結局、A市には複数の系統の教育制度や学校があるのだが、ここでは、教授語の違いからCBSEやICSEを英語ボード、州政府によるものをUPボードと呼ぶ。

2001年調査では、A市の教育の階層的な不平等は、通う学校の種類という質的な側面でもみられることが明らかになったのだが、育ちの不平等への関

心からいえば、異なる初等教育を受けた、または途中で退学した子どもたちのその後が気になる。学校の就学費、教授語、ボード試験、カリキュラム等の違い、あるいは教育が子どもにとってのライフチャンスであることを考慮すると、小学校時代の不平等は、中・高等教育段階を含む子どもの将来までそのままスライドしていると考えられることもできる。子どもの将来にまで予想される不平等というのは、たとえば、進学する教育段階の程度、通う学校の種類、さらに学卒後の職業選択、などの違いのことである。ただ、2001年調査は育ちのある時点を切り取ったスナップショットサーベイなので確かなことはいえない。そこで企画したのが2006年調査である。

2. 2006年調査の概要

この調査では2001年調査の結果をふまえて、子どもの育ちのプロセスを比較することをねらった。

子どもの育ちのプロセスをダイナミックに分析するためには様々な方法があるが、ここでは、若者から生活史を聞き取るという手法をとった。若者が語る生活史とは彼らが育ってきたプロセスそのものなので、現在の（厳密には10～20年前の状況になるが）A市の子どもの育ちのプロセスを分析するための格好の素材といえるだろう。また、調査対象としたのは様々な学校経験を持つ16人の高等教育対象年齢程度（20歳前後）の若者、男性12人、女性4人である。16事例は2001年調査からみえてきた教育の不平等に関わるA市における二つの条件、進学する教育段階の程度と通う学校の種類の違い、に着目して分類した三つのグループからそれぞれ5ないし6事例ピックアップした。それぞれのグループの性格を簡単にまとめると以下のようなになる。

英語ボードで学んだ若者：中等教育まで英語を教授語とする私立学校に通っていた若者である。中等教育修了資格はCBSEやICSE等のボード試験で得ている。現在、MBA（大学院レベルのビジネススクール）や州外の高等教育機関を目指し予備校に通っている若者が多い。聞き取りは基本的に

英語（補助的にヒンディ語）でおこなった。

早期に中退した若者：義務教育修了か、その中途で学校を離れた若者である。彼らが通っていた学校はヒンディ語を教授語とする公私立学校である。すべて働く若者たちである。聞き取りはヒンディ語のみでおこなった。

UPボードで高等教育まで進学した若者：中等教育まで主としてヒンディ語を教授語とする公私立学校に通っていた若者である。中等教育修了資格はUP州政府のボード試験で得ている。A市内の大学に通う若者、働く若者、MBA予備校に通う若者などである。聞き取りは基本的にヒンディ語（補助的に英語）でおこなった。

聞き取りの大項目は、①家族の状況、②生活史、③現在の生活と将来展望である。生活史は、各教育段階でどのような学校に通っていたか、誰のどのような意志で学校を選択したか、誰が学費を負担していたのか（奨学金制度の利用も含め）、塾や習い事の有無、当時の印象的な思い出などを、学校歴を軸に聞き取った。また、中退者に対しては中退後の生活についても聞き取った。聞き取りのまとめは、各グループの若者本人と家族の状況、学校歴を軸にした生活史、現在の生活時間（各2事例分のみ）に関する表として本稿末に添付した。なお、ここで紹介する若者たちの名前はすべて仮名である。

16人の家族の状況、育ち、現在の生活の姿をみるといくつかの特徴が、グループ毎に浮かびあがってくる。以下の個々のインタビューから得られた若者の声を挿入しつつ、それらの特徴を紹介する。

3. 英語ボードで学んだ若者

3-1 家族の状況 表3-1

彼らは、富裕層や中間層³⁾などに属する豊かな家族出身である。彼らの親は、自社ビルで服飾小売店を経営しているモナの親、政府から公共工事を請け負う建設会社を営んでいるラファールの親といった大きな自営業者、また、上級公務員（カイラーシュ、アルンの父）、大病院の事務職（アシ

ユワニの父）、高級私立学校の教師（ジョンの父母）などのフォーマルセクターでの雇用労働者であった。家族の正確な年収は聞き取っていないが、いずれも、月収が少なく見積もっても数千ルピー以上、場合によっては数万ルピーあってもおかしくない職業である。家族の保有財から判断しても、明らかに経済的に豊かな家族であるといえる。若者の口から子ども時代の思い出としてお金に困った経験が語られることもなかった。また、携帯電話、パソコン、自分用のバイクなどを持つ若者も多く、経済発展のなかで増えつつあるモノに囲まれた生活をしている。

学卒後のきょうだいを持つ事例をみると、旅行会社勤務（モナの兄）、フィットネスクラブの栄養士（アシュワニの姉）、銀行・保険会社勤務（アルンの姉）、高級私立学校の教師（ラファールの妹）など、親と同じような職業に就いている。家族構成をみると子どもの少ない核家族であった。

父母やきょうだいの学歴は高い。ほとんどすべての者が高等教育を修了している。さらに、彼らのほとんどは英語を母語レベルで使いこなすことができる。後にみるように親の子どもへの教育への関心はきわめて高く、行動的である。

社会関係としては、若者の家族をとりまく親族、近隣住民、若者の友人は基本的に経済的に豊かな家族であるということ、強固な紐帯を誇る同窓会組織を持つ名門私立学校を卒業しているといった特徴がある。

ラファールをのぞく若者は、他州での生活経験がある家族、あるいはUP州を出自としない家族出身（母語がヒンディ語ではない場合もある）であった。アルンやアシュワニの家族は父の転勤によって州間移動を経験している。カイラーシュの家族は、父の仕事の都合でビハール州に住んでいるが、カイラーシュは実家を離れて祖父母が住むA市にやってきた。また、モナの家族は祖父の代（印パ分離独立時）にパキスタンから移動してきた家族であり、ジョンの父母は南インド・ケーララ州出身である。これらのことは、彼らの家族は多言語環境に親和的であること、より具体的にいえばローカル語をつなぐ英語に親和的であることを意味している。さらに、後進州の地方都市・A市

の外の出来事や雰囲気を経験し、人々と交流できる条件にあったともいえる。

3-2 生活史と現在の生活から

①学校を中心とした育ち

彼らは、幼稚園から高校まで一貫して、英語ボードの私立学校で学んでいる。学校歴(表3-2)をみると、モナやアルンのように同じ学校に通っていた事例もあるが、転校も少なくない。転校の理由には親の転勤などもあったが、より良い教育を受けるために積極的に学校を選択しているという事情もあった。たとえば、カイラーシュは義務教育をビハール州の農村部ハザリバードで受けたが、一人実家を離れA市の高校に進学している。また、ジョンはかなり明確な意志をもって転校を繰り返している。

問:○○(ビハール州の小学校)と××(A市の高校)を選んだ理由は?

答:○○は、当時のハザリバードで一番良い学校だったのと家の近くにあったから。でも、ハザリバードは後進地域、田舎だったので、自分の将来を考えて8年生から実家を離れてA市に来た。A市では△△、◎◎、××の三つの学校をみて回ったけど、一番良かったのが××だった。(カイラーシュ)

問:○○(中学校)から××(高校)になぜ転校したの?

答:○○は二部制の時間割をとっていたから。中学生までが午前。高校生からは午後という形になっていた。○○はとても良い学校だけど時間割がね。学校が午後からになると、学校が終わって家に戻るのが夕方になって、疲れて勉強する余裕がなくなる。それで二部制ではなく午前中に学校がある××に転校した。勉強する時間がもっと欲しかったということ。

問:高校を途中で変えたのはなぜ?

答:××のICSEボードは英語中心で、インド工科大学(IIT)入試を考えたら理系科目に重点をおくCBSEボードで勉強した方がよいと思ったので。(ジョン)

彼らが通っていた学校の特徴は、施設や課外プログラムが充実していることである。子どもの頃の思い出を聞くと、こうした施設を使って球技等

をして遊んだこと、課外プログラム(ダンス・歌・弁論)での経験等がしばしば語られた。

ジョンを除く5人はすべて塾に通った経験を持っていた。試験前に少しだけ通ったという者もいたが、アルンは高校の頃、「ボンベイで一番良い塾に毎日通っていた」という。さらに、習い事を経験していた若者も多い。たとえば、カイラーシュは中学生の頃にダンスを、ジョンは中学から高校にかけてギターやタブラ(ドラム)を、アルンは高校生の頃から歌を、ラフルは中学生の頃に水泳とテコンドーを習い事として経験していた。

英語ボードの学校の学費は、他の9人の若者が通っていた学校に比べると非常に高い。2001年調査によると、小学校の段階で、公立学校は授業料がほぼ無料で、UPボードの私立学校は月額数十ルピー程度であるが、英語ボードの私立学校の授業料は数百ルピーであった[Sasaki2004:25]。学費は教育段階が上位になるほど高くなる。ジョンが通っていた高校の授業料は月額1300ルピー(雑業労働者の月収に匹敵する)であったという。英語ボードの学校に通うためにはその他にも施設整備費や寄付なども要する。塾や習い事にもそれなりの費用がかかることはいうまでもない。良い教育を求め転校すること、設備の整った私立学校で学ぶこと、塾通いや習い事の経験があるといった育ちの特徴は、家族の経済的豊かさに支えられている。

また、彼らの育ちのこうした特徴は親が積極的に子どもの教育に関わっていることを示している。若者たちが語る子ども時代の思い出には、学校選択や塾だけでなく、子どもの勉強をみる・勉強についての相談にのる、本や教材を買い与える、好成绩をあげた子どもに「ごほうび」を出す、といった学校教育を基軸に積極的に子育てをする親の姿がしばしば登場する。

②能力主義的競争

彼らの多くは経済発展のなか拡大しつつある新しい「良い仕事」を目指している。

問:将来は何になりたい?

答:長い人生だから、ひと言では言えないけど…<中

略> 目先のことをいうと、MBAをとって投資とか保険とか金融の仕事に就きたい。自分の家族や親戚のなかで、その業界で仕事をしている人がいないので、家族のバックグラウンドがないから、相当、自分自身で頑張らないといけないと思う。(モナ)

問：将来は何になりたい？

答：まずはMBAを取ること。それから外資とか多国籍企業のサラリーマンになって、たくさんお金を稼ぐこと。

問：さっきCEOになりたいって言っていたよね？

答：10年くらいでCEOになりたい。

問：難しいでしょ？

答：難しいけど頑張る。(カイラーシュ)

問：将来は何になりたい？

答：まずは入試に合格してIITで勉強すること。勉強以外のことでいえば、友人を作る力やリーダーシップを磨きたい。

問：仕事は？

答：IITに入れたらどんな仕事にも就けると思う。余裕があれば、IITの後にマネジメントの勉強をするために大学院に進学するのもいいかもしれない。それからIITを卒業すると大学の研究者になる道もあるけど、自分はビジネスの世界に進みたいと思っている。

問：IITには入学できそう？

答：とても難しいと思う。でも自信はある。それにIITの他にも良い工科大学はたくさんあるから、どこかには入れるんじゃないかな。(ジョン)

彼らの語りのなかには「成功」のためにはハードワークが必要であるという認識がみられるが、こうした認識は彼らの生活のなかで実践されているようだ。現在の生活時間(表3-3)の中心は受験勉強である。IITを目指すジョンの一日の学習時間は10時間を超えており、その理由として彼は「IIT入試はとてもタフだから」と語っていた。彼らの現在の生活は能力主義的競争の中にある。子ども時代の学校選択や塾通いも「良い学校」「良い成績」を目的としたものである以上、さきに見た彼らの育ちのありようのベースには能力主義の論理があるといえる。彼らが能力主義の論理を受け入れていることは、ジョンの家族の出身地ケー

ララ州に比べてUP州の親が一般に子どもの教育に不熱心であることについての彼の見解とカイラーシュの留保政策批判からもうかがえた。

(ケーララと比べてUP州の親の教育意欲が低いということについて)

問：じゃ、親たちをどうやって動機付ければいんだろう？何か意見を持っている？

答：<中略>…大事なことは教育が人生にとって役に立つことを分かってもらうこと。教育が役に立つというのは、第一に知識を得て世の中のことを知ることができるようになるから、それから、職業に就く機会に関わるから。もっとたくさん稼げる仕事にね。インドでの教育の意味の一つは職業を得ることだと思う。これはたとえ農民でもそう。農民でも自分の子どもに教育を受けさせないと、将来、利益を得ることはできない。インドは農業国だけど、今は農業だけじゃ良い暮らしをするには十分じゃなく、何か別の仕事もしなくてはならないから。それに、教育を受けることは稼ぎだけじゃなくって名誉や社会的地位にも関わると思う。インドでは人の評価は二つで決まる。一つは経済力、もう一つは学歴。少なくとも、自分の家を例にすると、僕の家はそんなにお金持ちの家じゃない。ミドルクラスくらいだと思う。僕の家があるコロニーにはお金持ちがたくさんいるけど、ここに来て近所の人と話をすると、彼らが如何に僕の家族のことを尊敬しているか分かるよ。それは、父の学歴が高く、教師をしているから。(ジョン)

問：インド社会について今、一番興味があることは何？

答：留保政策。留保政策は意味がないと思う。留保政策があると、才能のある人間、自分のような人間が苦勞するから。今、才能のあるたくさんの学生が機会を与えられないでいる、留保政策はインドの教育の質を悪くしていると思う。(カイラーシュ)

競争は学校のなかでは「優等生」「劣等生」を生み出す。ジョンは典型的な「優等生」であるが、聞き取り対象となった若者のなかには「劣等生」もいた。成績が悪いアルンはMBA予備校に通いつつもプロ歌手になる夢を持っており、盛んにオーディションを受けているという。彼は子どもの頃から、勉強のできない自分に対して、勉強をみ

たり街一番の塾に通わせたりしてきた親の姿を苦笑しつつ語っていた。対照的にアシュワニは、成績が悪く、親の期待に応えられない自分に苦悩する若者である。この悩みとどの程度関係があるのかは不明だが、アシュワニは10代後半から精神的に不安定で、現在、精神科に通院している。

③競争のアドバンテージ

彼らのなかには「優等生」「劣等生」がいるが、16人全体のなかで英語ボードの若者は、能力主義的競争を念頭におくと共通したアドバンテージをもっている。その一つは、競争に親和的な構えをしているという点である。このことはハードワークを善とする彼らの価値観にも顕れているが、それぞれが自分の将来を主体的に設計しようとしている姿からも示唆される。「自由な個人」として振る舞えることは、競争のプレイヤーの基本資質であろう。カーストや性により定められた生き方が割られるという伝統が未だ強いインドにおいて、彼らは比較的自由に職業や結婚を展望している。結婚についていえば、5人とも「好きな時に好きな人と結婚したい」と言っていた。また、親の本心は分からないが、少なくとも若者たちは、親は自分の「自由」を尊重してくれているとみている。

問：結婚はどうするの？

答：自分がしっかりした仕事に就いてから。今は相手が誰とはいえないけど。

問：相手は親が選んでくれるの？

答：お見合いにはならないと思う。母はいつも「好きな人と結婚しなさい」と言ってくれるから。自分の好きな人を両親に会わせて、親が気に入ってくれたら結婚することになるんじゃないかな。(カイラーシュ)

問：結婚についてはどう思っている？

答：とても先の話になるけど…少なくとも25歳過ぎくらいには結婚することになるんじゃないかな。相手は美人じゃなくてもいいけど。もちろん、美人に越したことはないけど、自分と関心や経験をシェアできる人がいいな。長い間一緒にいることになるから、精神的な関係性の方が大事だと思う。(ジョン)

問：あなたの将来展望について親はどう思っているのかな？

答：特にないと思う。すべての判断を自分に任せてくれている。医者になろうが、弁護士になろうが、自分がやりたいものに向けてサポートしてくれている。これだけでもラッキーなこと。インドでは、親が子どもの将来を決めることが多いからね。(ジョン)

むしろ、親が尊重する「自由」とは、アルンやアシュワニなどの事例を考慮すれば、あくまでも親が設定した枠のなかにある「自由」と考えたほうがよいだろう。

もう一つのアドバンテージは競争の重要な条件となる英語能力に関わっている。若者の多くは英語をほぼ母語レベルで使いこなしていた。むしろ現地語も話すことができる。英語をどのように身につけたかという問いに対しては、学校や家庭内で教わったという答えに加えて、日常のなかで「自然に」身につけたという答えもみられた。

問：どうやって英語を使えるようになったの？

答：まずは、英語ミディアム学校（英語を教授語とする学校）だったから。もう一つは、英語ミディアム学校で教育を受けた母が英語を重要視していて、読み方、書き方、辞書の引き方などを教えてくれていたから。それから、小さい頃から英語の小説を読むのが好きだった。(モナ)

問：どうやって英語を使えるようになったの？

答：まず何よりも、父母が流暢に話しているからだと思う。次に英語ミディアム学校で勉強してきたから。後は、英語文学なんかが好きだったからかな。(ジョン)

問：どうやって英語を使えるようになったの？

答：学校で勉強したから。あとはボンベイの環境かな。あそこは日常的に英語を使う場所だから、一番はボンベイの環境のおかげかもしれない。(アルン)

日常のなかで英語を身につけることができるのは、大都市での生活や州間移動を経験してきた彼らの育ちに起因するアドバンテージである。また、彼らの多くはコンピュータのリテラシーについて

も、子どもの頃から身近にあるパソコンを日常的に使い「自然に」獲得していた。

4. 早期に中退した若者

4-1 家族の状況 表4-1

彼らは貧しい家族出身である。家計の特徴は、主たる生計維持者がはっきりせず収入源が複数あること、その収入源はいずれも雑業的な雇用労働、零細農業や自営業、内職など多くの収入が期待できないものであることである。アニールの家族の場合、病気の父は無職で家計はアニールと弟がサリー工房の労働者として稼ぐ収入によって支えられているが、アニールの月収は2000ルピーに過ぎない。農地を持っている家族もあるがその規模は小さい。プラタープの家族の場合、父母が0.4ha程度の農地で野菜作りなどを行っているが、その他、兄とプラタープがビターイーの仕事をして家計を補っている。若者本人、あるいは家族がビターイーの仕事をしている者が多く含まれているが、ビターイーの仕事とはサリー用の金糸を作る仕事である。出来高制で一日50-60ルピーの収入（月収1000ルピー程度）になるという。その他、登場する自営業や雑業を列挙すると、花栽培とマーラー作り、建築関連の職人、サイフ作りの内職、携帯電話の電波塔の番人など、いずれも収入が低い（月収1000-2000ルピー程度であろう）職業である。家族の規模は大きい。ジョイント家族の形態をとっていることもあるが、基本的には子どもの数が多いためである。アニール、プラタープ、カマラは5人きょうだい、サンギータとサンジャエは8人きょうだいのなかで生まれ育っている。彼らの家族はいわば「わずかな収入を寄せ集めて生活する大家族」である。それぞれの家族の収入は分からないが、数千ルピーの月収で10人弱の家族が暮らしているというイメージになるだろう。

家族の学歴は総じて低い。とくに父母は正規の学校教育を受けていないことが多い。また、家族のなかで勉強をみてる人がいなかったと語る若者も多い。しかし、彼らの家族が教育にまったく関心がないわけではないことを強調しておく必要もあるだろう。父母の世代と比べて子世代の学

歴は高く（中等教育まで進んでいる事例もある）、弟妹たちのなかで不就学者はいないからである。ただ、英語ボードの若者の家族に比べると教育について積極的であるとはいえない。

社会関係については多くのことは分からないが、少なくともいえることは「お金持ち」との付き合いは彼らにはなく、似たような境遇にある家族や友人と付き合っていることである。ただ、妻の実家からの経済的援助をあてにして自分の将来を思い描いている若者（アニール）もあり、貧しい家族同士の社会関係のそれなりの役割も示唆される。

4-2 生活史と現在の生活から

①労働を通じた育ち

生活時間（表4-3）からは、彼らの現在の生活は労働を中心に行っているといえるが、聞き取られた生活史からは、子ども時代から現在とそう変わらない生活をしてきたことが分かった。若者たちは幼い頃からよく働いている。このことは学校歴（表4-2）を参照しても明らかで、早期に学校をやめた後の彼らの生活の中心は労働にあった。たとえば、サンジャエは、小学生の頃からビターイー工房の徒弟として働き、小学校卒業後から現在に至るまでずっとビターイー職人として働いている。また、サンギータは子どもの頃から今とさほど変わらず家の仕事の手伝いをしている。彼女には姉がいるが、サンギータが小学生の頃に他家に嫁ぎ、それ以降、水汲み、料理、掃除、洗濯、幼いきょうだいの世話など家事全般がサンギータの仕事になったという。彼女の家族の生業は、家の畑で花を栽培し、それを材料に一家総出でマーラーを作り、父親が街に売りに行くというものである。畑仕事と家でのマーラー作りをサンギータは子どもの頃からよく手伝っていたという。二人とも、仕事が忙しく宿題をする時間や遊ぶ時間がなかったという思い出を語っていたので、彼らの仕事は決して軽いものではなかったと思われる。とはいえ、学校に通えなくなるほどではなかったようだ。事実、小学校は卒業しているし、小学校時代の彼らは主に休日や放課後に仕事をしていたという。ちなみにA市の一般の小学校の就学時間は、半日程度で休みもかなり多い。

彼らの子ども時代の労働のもう一つの特徴は、大人になることに密接に関連しているということである。徒弟労働はもちろんであるが、サンギータやカマラのように家業や家事を手伝うことも彼女らの成長に深く関わっている。家事全般をこなしつつ家業を補助するのはインドの一般的な既婚女性のありようなので、彼女らの子ども時代の労働はいわば妻・母になるための労働といってもよいからである。また、学歴が低く職業選択が制約されている彼女らが、雑業労働者の妻となり、母となる可能性はきわめて高い。

学校ではなく労働を通じて大人になっていくというのが彼らの育ちの大きな特徴であるが、この背景にはまず家族の貧しさがあると思われる。

問：なぜ学校をやめたの？

答：父がサリーの仕事を辞めて、病気にもなって、家族のためにお金を稼がなきゃいけなくなったから。(アニール)

問：どうして勉強をやめたのかな？

答：学費を出してくれる人が家に誰もいなかったから。

問：お父さんが学費を出してくれなかったんだ？

答：お父さんは僕の学費を出せる訳がないよ。その頃は、稼いでいるのはお父さん一人で、食べる人が4人もいたから。これで僕が勉強を続けられたと思う？(サンジャエ)

ただ、彼らの中退は貧しさのため学校を断念したという側面だけでは説明できないようだ。学校について語る彼らにはあまり悲壮感がないようにみえた。中退への悔恨や学び直しへの強い意欲がうかがえなかったからである。中退の理由を上手く説明できない若者や成人教育センターなどで勉強をやり直すつもりもない(考えたことがない)という若者もいた。さらに、学校教育について、多くの若者は価値を認めつつも、英語ボードの若者に比べると彼らのイメージはかなり抽象的である。

問：なぜ中退したの？

答：勉強する気がなくなったから。

問：なぜ？家の仕事の方が良かったのかな？

答：両方好きだったけど、勉強する気がなくなった。

問：なぜ？

答：<沈黙>……何て言えば良いんだろう

問：じゃ、中退したことを今、どう思っている？

答：どうとも思わない。

問：今、チャンスがあれば勉強したい？

答：したくない。

問：どうして？

答：<沈黙>……(サンギータ)

問：中退したことを今どう思う？

答：辞めなきゃよかったと思う。今からでも勉強したい。でも小さい頃に学校を辞めたので、もう一度勉強を始めるのは大変だと思う。

問：勉強をもう一度始めるチャンスはあるのかな？大人のための無料教育センターとかで。A市にはあるのかな？

答：知らない。

問：(調査アシスタントに成人教育センターがA市にもあるらしいことを確認して)ここにもあるみたいだけど、行ってみたい？

答：時間がないから難しいと思うな。(アニール)

問：子どもの頃、将来何になりたかった？

答：将来の夢は特になかったけど、勉強は続けたかった。勉強をするとバラー・アドミー(大人物)になれるから。(プラタープ)

問：学校での勉強は日常生活や将来の役に立つと思う？

答：思う。

問：どういう風に？具体的には？

答：勉強してれば何にでもなれるでしょ。(カマラ)

これらのことは、教育への意欲や関心の低さなどパーソナルな次元で解釈することもできるが、その背景も考慮する必要もあろう。英語ボードの若者の親と違い、中退者の親は「良い学校」を探し求める、塾に通わせる、など子どもが学校のなかで「成功」することを目的としたサポートを積極的にしていない。このこと背景には、学校教育に関わる経験が乏しく、経済的にも窮乏しているという親の状況が、まずはあるのだろう。さら

に、子どもの頃の夢についてのアニールの語りは、若者たちの身近には、学校での勉強を通じて将来を展望するための「モデル」がいなかったことを示唆している。ちなみに、中退者以外の若者たちに子どもの頃の夢を聞くと、明確な職業（公務員、医者、宇宙飛行士など）をあげる者が多かった。

問：学校の先生以外で勉強をみてくれた人はいた？

答：いなかった。

問：お父さんやお兄さんは？

答：みんな学がないから教えてくれなかった。(プラタープ)

問：子どもの頃、将来、何になりたかった？

答：よく分からない。小さい頃は、将来のことを考えるための知識がなかったから。医者って何？ 先生って何？それからどうやってなるのか、全然知らなかった。(アニール)

②成り行きとしての将来、ささやかな将来展望、抽象的な夢

彼らにとって結婚は自分の意志の外にある出来事のようなものである。アニールとカマラはいわゆる「幼児婚」の経験者である。なお、現在のA市では「幼児婚」といっても、子どもの頃に形式的に結婚（婚約）をし、ある程度の年齢になって同居（実質的に結婚）するというスタイルが一般的である。アニールは既に同居しているが、カマラは、まだ夫と同居していない。

問：結婚はいつしたの？

答：2001年に結婚した。相手は子どもの頃から決まっていた。

問：子どもさんは、まだ小さいよね。将来について何か考えている？

答：今は身体が弱いのが心配。教育は受けさせたい。できれば大学くらいまで。

問：お金がないって言うけど、学費はどうするつもり？

答：お店を始めたならなんとかなると思う。

問：結婚しなかった方が楽だったんじゃない？少なくとも奥さんや子どもを食べさせる心配しなくてすむでしょ。

答：結婚は親が決めたことだから仕方がない。(アニール)

問：結婚はどうするの？

答：今は結婚する気はない。3、4年後くらいには結婚したい。でも、親がどう考えているかは知らないけど。

問：もし、親が今結婚しろって言い始めたらどうする？

答：どうしようもないよ。親が言うんだから結婚しなきゃいけないだろうね。(プラタープ)

問：あなたは結婚してるんだってね。自分の結婚についてはどう思う？

答：本当は結婚したくなかった。

問：なぜ？

答：まだ自分は小さかったから。でも親が結婚しなさいって言ったから。

問：親にイヤだって言わなかったの？

答：言ったけど、親戚や近所の人が良い縁談だからと親にしきりに勧めていて。(カマラ)

女性事例の結婚に本人の意志が介在する余地の少ないことは、妻・母になることが彼女らの最も可能性の高い将来像であることも考えると、彼女らの将来はほぼ「成り行き」として定まっていることを示している。これは「自由」に将来を展望していた英語ボードの女性事例・モナと対照的である。尤も、モナも女性であるが故の制約に直面していた。たとえば、彼女はボンベイでの一人暮らしを親から反対された経験があり、男性事例と比べると「自由」ではないのだが、サンギータらと比べた場合のモナの「自由」の幅は明白であろう。一方、中退者のなかでも男性は、それなりに「自由」に将来を展望している。彼らはより稼げる仕事を求めて転職を考えていた。

問：今、一番欲しいモノは何？

答：お金があれば何でも欲しい。

問：一番は？

答：商売を始めるためのお金が欲しい。2000ルピーくらいあったら、雑貨屋やパーン（かみタバコ）屋台を始めることができる。

問：人に雇われるよりも自分で商売をやる方がいいの？

答：自分のお店だと自由だから。儲けを全部自分のもの

にできるし。(アニール)

問：将来はどうするつもり？

答：バラード・アドミーになっていい暮らしがしたい。

問：ビターイーの仕事を続けてバラード・アドミーになるの？

答：いや、別の仕事で。今、バイク修理の仕事を習いたいと思っている。

問：チャンスはあるの？

答：ない。時間はあるけど。場所は知っているんだけど、今、空いている場所がない。バイク修理屋に弟子入りを頼みにいったことはあるけど、みんな自分の子どもがいて、弟子入りを断られた。

問：ビターイーは儲かるの？

答：儲からない。

問：一日いくら稼げる？

答：50~60ルピーくらい。自分が使うお金くらいしか稼げない。(プラターブ)

彼らの将来展望には三つの特徴がある。まずは、彼らの選択肢は基本的に雑業であり、そう大きな収入増などは望めないという意味で、ささやかな展望といえる。次にこうした希望を満たすことも彼らにとって容易ではないということである。露店を開きたいアニールは資金を用意できていないし、プラターブは弟子入り先を探すのに苦労している。サンジャエは転職を諦めている感もあった。

問：将来はどうするつもり？ 何か考えている？

答：何も考えていない。ただ、今の仕事を続けたいだけ。転職は無理だと思う。別の仕事を習う時間もお金もないから。家族も今の仕事を続けてほしいと思ってるんじゃないかな。

問：一生、ビターイーをやってるの？

答：もちろん転職はしたいよ。今でも仕事を教わるための時間なら少しある。でも仕事を習いに行くと朝から晩までそこにいなきゃいけないでしょ。そうすると、お金を稼げないから家族が困るよ。だから、望んでも他の仕事を習うのは無理。

問：できるとすれば、どんな仕事を習いたいの？

答：良い仕事。それからビターイーの仕事を自分の家でできるようにもしたい。

問：ビターイーをビジネスでやるのにはそれなりのお金がいるでしょ？

答：うん。それで今少し貯金をしている。貯まったらまずは家を建てて、その次はビジネスに使いたい。(サンジャエ)

最後の特徴は男性事例がしばしば口にする「バラード・アドミー（直訳すれば『大きな・人物』という意味）」というフレーズに関わる。教育を受ける意味についても「バラード・アドミーになれるから」と彼らはよく言う。「良い暮らしをしたい」「教育を受けると良い暮らしができる」といったニュアンスであるが、仮に彼らが別の雑業に転職できたとしても、また多少の教育を受けたとしても生活が大きく改善されるとは思えない。三つ目の特徴は、現実的な・ささやかなイメージに加えて、抽象的なイメージ（夢）として将来を展望していることである。

③社会への低い関心と少ない知識

中退者は社会経済的に最も恵まれない条件のなかで生まれ育っているが、自分のおかれていた立場についての不満を、インド社会の情勢に絡めつつ語ることはなかった。他の10人の若者は皆、社会問題等についての意見を求めると滔々と意見を述べていたことと対照的である。中退者の社会への関心や知識の低さは、彼らが関心や知識を持てる状況におかれていないという条件にも関わっているようだ。サンジャエは日々の生活に追われ社会について興味がないといい、字が読めないサンギータは新聞に書いてあることが理解できないという。

問：インド社会について、今、一番興味があることは何？

答：知らない。興味がない。僕は『毎日のチャパティ』のことしか考えていないから。(サンジャエ)

問：インド社会について、今、一番興味があることは何？

答：社会のことは何も知らない。

問：テレビをみてるでしょ。家にテレビあったよね。ニュースはみないの？

答：テレビは見るけどドラマと映画だけしか見ない。ニュースは興味がない。

問：新聞は読まないの？

答：読むけど意味が分からないので写真のみだけ。
(サンギータ)

5. UPボードで高等教育まで進んだ若者

5-1 家族の状況 表5-1

5人の家族は中間層と貧困層の狭間にあり、多様な階層的な位置付けができる家族が含まれている。強いて分けるとすれば、サンジープの家族は明らかに豊かな層に近く、その他の家族は貧困家族よりもやや経済的な条件に恵まれている層といえる。

アショーク、プリヤ、プラカーシュ、スレーシュの家族は、職業のあり方が中退者の家族に似ている。複数の小さな収入源で暮らす大家族が彼らの家族の基本的なスタイルであった。ただ、アショークのように家族の規模が小さい事例があること、4家族すべてにフォーマルセクターの下層労働者（公立学校の教員）や雑業的ではあってもビターイーよりもステイタスが高いと思われる仕事（私立学校の教員、ドライバー、PCスクールのインストラクター）をしている者が含まれていること、プラカーシュやスレーシュのように農地に加えて小さな店を営む家族がみられることから、中退者の家族よりもやや経済的に恵まれていると考えられる。

父母のなかには不就学者がいないわけではないが大卒者も含まれ、彼らのきょうだいは少なくとも中等教育を修了しており、中退者の家族に比べて学歴は高い。また、学校教育の価値を認め、積極的な行動をしている者もみられる。アショークの母は、アショークに勉強して立派な人になってほしいと考え、学費を稼ぐために必死に働いていたという。スレーシュは自分の父が苦学（リキシャー車夫をしながら大学を卒業した）の末に教員になったというエピソードを誇らしげに語ってくれた。ちなみにスレーシュは政府が公認する指定カースト（かつての被差別カースト集団で、留保政策等のアフーマティブアクションの対象にな

っている）出身の若者である。

社会関係について多くのことは分からないが、基本的には中退者と同様「お金持ち」との付き合いはほとんどないようだ。

サンジープの家族はかつて人を雇ってビターイーのビジネスをしていたが、現在は保険会社の代理店をしている。保有財から判断しても5人の若者のなかで抜きん出て豊かな家族と考えられるが、英語ボードで学ぶ若者の家族ほど豊かではない。サンジープの家はどちらかという貧しい人々が住むエリアにあり、また、サンジープの母は彼の学費を稼ぐために必死に内職をし、彼もそれを手伝っていたというエピソードを語っていた。父母の学歴は中等教育修了、姉、妹は大学・大学院を経験している。サンジープの母はかなり教育熱心である。

5-2 生活史と現在の生活から

①学校教育と労働が混淆する育ち

サンジープと他の4人の若者は家族の状況がかなり違うので、まず4人の若者についてみてゆきたい。彼らの育ちは働くことが日常的であったという点で、中退者の育ちに似ている。アショークは家の畑仕事や牛の世話、プリヤはマーラー作りと家事手伝い、プラカーシュは家の畑仕事の手伝い、スレーシュは家のお店の手伝いなどを、子どもの頃からかなりの程度していたという。とはいえ、彼らは学校に通いつけているので、いわば学校教育と労働が混淆する生活を通じて育ってきたといえる。その具体的な姿は、スレーシュの現在の生活時間（表5-3）にあらわれている。聞き取り当時は、大学は夏休みだったが、スレーシュは新学期に備えて勉強をしつつ、家の仕事（衣類店の準備、店番、後片付け）などにも時間を割いている。

ただ、彼らの労働は、中退者と違い経済的必然性に強く迫られての労働ではなかったようである。たとえば、アショークは常に母から「宿題を済ませてから仕事をするように」と言われていたといい、彼はまた子どもの頃の仕事について「健康のため」という理由をあげていた。

問：学校に通っていた頃、働いていた？

答：日曜日なんかには花作りの手伝いをしていた。

問：お手伝いをするのは好きだった？

答：家の仕事を手伝うのは好きだった。健康のために少しくらい仕事をするのは良いことだし、勉強の邪魔になるほどしてなかったから。母はいつも「宿題を済ませてから仕事をしなさい」と言っていた。(アショーク)

中退者とのもう一つの違いは、学校の外で勉強をみってくれる人がいたという若者（アショーク、スレーシュ）、塾や英語を教授語とする学校に通った経験のある若者（アショーク）など、学校教育の比重が比較的大きいことである。子どもの頃、自宅にあった本や図書館で借りてきた本などを読んでいたという若者も少なくない。子ども時代によく本を読んでいた経験というのは、英語ボードの若者にとってはごく当たり前のことであったが、中退者のなかではあまりみられなかった。

問：小中学校の頃、学校の先生以外で勉強をみってくれた人はいた？

答：隣のオジサン

問：オジサンって親戚の人？

答：親戚じゃないけど、兄みたいな人。その人は今結婚しているけど、結婚するまでの間、よく勉強をみってくれた。特に英語を。(アショーク)

②学歴資格の意味

プラカーシュとプリヤは大学を卒業しPCスクールのインストラクターや私立学校の教員として働いている。これらの仕事は基本的にある程度の学歴を要する。彼らは学歴を活かして職業を選択しているということになるが、大学生のアショークやスレーシュも公務員や学校の教員など、大卒程度の学歴が必要となる職業に就きたいと考えていた。また、親も学歴を活かした職業に就くことを期待しているようで、プラカーシュの親は家業を継がせる気がないという。

問：大学を卒業したら何になりたい？

答：公務員になりたい。コラプション（政治や行政の腐敗）を正したいから。フェアでクリーンな社会を作りたい。

い。

問：公務員にはなれそうなの？

答：難しいと思うけど、なれると思う。(アショーク)

問：子どもの頃、将来何になりたかった？

答：小さい頃は先生になりたかった。今はエンジニア。公務員の。それがダメなら数学の先生になりたい。(スレーシュ)

問：あなたの将来について両親は何か言っている？

答：大学で資格をとってコンピュータの仕事の続けろって言っている。

問：農業を継ぎなさいって言われないの？

答：言わないな。誰が継ぐのか決まっていけど、農業だけじゃ生活できないから。土地は人に貸してもいいんじゃないかな。畑は日曜だけやってもできるくらいの広さしかないからね。(プラカーシュ)

大学や大学院卒という高学歴を活かして職業を展望しているという点では、英語ボードの若者に似ているが、実は大きな違いがある。UPボード若者たちの学歴の意味は英語ボードの若者たちの学歴と比べてかなり「軽い」からである。A市の大学を卒業した程度では、英語ボードの若者がねらう「良い仕事」には就けない。これが、英語ボードの若者たちが、A市の大学を卒業した後にMBAに進学する、州外の名門大学を目指す理由である。アショークたちの学歴が意味をもつ職業は、A市の場合、公務員と私立学校の教員くらいであろう。

また、彼らの学歴の意味をさらに軽くするもう一つの事情がある。アショークの語りのなかにある「コラプション」とは政治や行政の腐敗のことを意味する。公務員になるためにも有力者とのコネクションやワイロ（「グース」と呼ばれている）が不可欠であり、このことはA市の人々にとって常識といってもよい⁴⁾。私立学校教員として働いているプリヤは、聞き取り当時、州政府の無料給食プログラム監督官の採用試験を控えていた。プリヤの給料はきわめて低く（月額500ルピー）、6000ルピー以上の月収がある監督官になりたいと考えていた。ただ、グースを用意する当てがない

ことが彼女の目下の悩みだった。学歴インフレとコラプションは、高学歴を持ちながらそれを活かした仕事に就けない（その場合、中退者と同じような仕事をするようになるのだろう）「中途半端な高学歴者」を生み出している。

③経済的制約とUPボードという制約

プリヤのエピソードは、彼女が中退者よりもやや経済的に恵まれているとはいえやはり経済的制約に縛られていることを示しているが、このことはサンジープを除く3人の若者にも共通している。学費の工面に苦勞しているスレーシュは、大学を卒業できるかどうか心配していた。

問：今、一番ほしい物は何？

答：本、大学2年生で使う教科書がほしい。教科書を買うお金がない。家族の人数も多いし、病気の母もいる。父の給料は少ないし。

問：お父さんの給料がいくら知っている？

答：1800ルピーくらい。僕がアルバイトで稼いだお金は全部生活のために使ってるから、教科書のためのお金がない。（スレーシュ）

問：今、一番困っていることは何？

答：大学2年に進学できるかどうか。2000ルピー払わないと進学できないんだけど。（スレーシュ）

聞き取りでは奨学金の利用状況も確認した。基本的に親が学費を負担する英語ボードの若者、また、学校経験（奨学金は一般的に中等教育以上で制度化されている）が短い中退者にとって奨学金はかなり縁遠いようだ。英語ボードの若者のなかでは利用を考えたこともないという者も少なくなかった。一方で、UPボードで高等教育まで進学した若者にとっては、奨学金は比較的身近な選択肢で、実際に利用した・している者もいた。ただ、彼らの経済的制約を緩和するという点において、奨学金制度は有効に機能していないようにみえる。たとえば、大学・大学院の通信制学生だったプリヤには奨学金利用の資格が制度的になかったという。また、指定カースト出身であるが故に、特に手厚く奨学金を受けることができる立場にあるス

レーシュによると、その額は授業料を賄う程度で十分な額ではないという。さらに、教員による奨学金の「ピンはね」を彼は疑っていた。

奨学金横領の真偽は分からないがUPボードの状況を考慮すると、スレーシュの語りはそれなりの真実味を帯びている。2001年調査でも確認したことであるが、UPボードの教育の質は良いとはいえない。質というのは設備や教員の資格などにも関わるが、加えて重要なのは、かなり「いい加減な」雰囲気の中にある学校も少なくないということであろう⁵⁾。

問：学校や先生についての不満はあった？

答：先生が学校で真面目に勉強を教えてくれないこと。先生たちが学校では真面目にやらずに、放課後の塾で一生懸命教えている。先生の塾に行かないと学校で良い成績をつけてくれないし。それから、奨学金をもらっても直接自分が受け取れないこと。先生が自分のものにしていく。（スレーシュ）

UPボードの問題は、現在は英語ボードの若者と一緒にMBA予備校に通うサンジープが繰り返し批判的に語っていた。

問：学校や先生についての不満はあった？

答：高校の時にひどい校長がいた。生徒を殴ってばかりいた。ある時にクラスが終わった後に生徒が集まってその校長を殴ったことがある。その後、校長が変わってよくなったけど。でもUPボードの先生は全体的にひどいよ。何の知識もないのに、パーンを買って来いととか、お金をよこせだとか言ってばかりだから。僕が高校の時に毎日塾に通わなきゃいけない理由はこのこと。（サンジープ）

問：学校での勉強は、日常生活や将来の役に立つと思う？

答：いいえ。教育制度が良くないから。僕は教育のバックグラウンドが悪い。家にも近所にも教育を受けた人がいなかったからね。もし学校がしっかりしていたら、自分は今、ここで（予備校で）勉強する必要はないと思うよ。大学までの教育でちゃんとやっていたらMBAのためにあらためて英語を習う必要はないでしょ。

問：じゃ卒業資格はどうだろう？役に立つと思う？

答：一応ね。たいした意味はないけど。自分にとってMBA入試を受ける資格にはなっているから。その程度。

問：UPボードについてはどう思う？

答：UPボードの先生は教える気も知識もない人が多い。いい加減な先生ばかり。僕が行っていた小学校では、生徒にパーンを買に行かせていた先生がいた。先生は何も教えてくれない。

問：じゃ、なぜ別のボードの学校に転校しなかったの？

答：僕の家族にはUPボードがちょうどよかったから。他のボードはお金がかかるからね。インドの教育は改革が必要だと思うよ。(サンジープ)

サンジープは他の4人と比べて明らかに豊かな家族であるが、英語ボードの学校に通う余裕はなかったという。彼はスレーシュ同様にUPボードの「いい加減さ」を批判しているが、語りのなかではもう一つの問題点も指摘している。英語ボードの若者と同一将来を展望する彼にとって英語で教育を受けなかったことが大きな不利になっているという。実際、サンジープはあまり英語が得意ではない。聞き取りもかなりの程度ヒンディ語ですすめることになった。聞き取り当時、彼は英語ボードで育った若者たちにキャッチアップするために英語の猛特訓をしていた。UPボードはその絶対的な質の悪さだけでなく、「良い仕事」をめぐる競争を念頭におくと、英語ボードに比べて相対的にも劣っている。

若者たちの将来は、生まれ育つ家族の条件はもちろんのこと、貧弱な奨学金制度、学校や教員の「いい加減さ」、さらには複数の系統の教育が存在するという、A市の教育制度からも制約を受けている。

6. まとめ：「育ちの不平等」の構造の素描

16人の若者たちの育ちのプロセス、現在の生活、予想される将来は大きく異なっていた。英語ボードで育つ子どもは豊かな家族出身であり、学校での学びを中心に育ち「良い仕事」をめぐる能力主義的な競争のなかにある。UPボードで育つ子

どもは、貧しい家族あるいは庶民家族出身で、労働と学校教育が混淆する空間のなかで育っている。ただ、貧しい家族の子どもは、早い段階で学校をやめ学歴不要のインフォーマルセクターの労働者として巣立ち、経済的にやや余裕がある家族の子どもは高等教育まで進学し、学歴を使った将来を展望している。後者については、しかし、UPボードで得た学歴の重みのなさから、場合によっては雑業労働者やその妻になるという将来も予想される。

子どもの育ち方の違いは、まずはインドの近代化という大きな「うねり」のなかで解釈できる。英語ボードの若者たちの生活の特徴付ける溢れるモノ。学校化された空間、能力主義的競争、主体的な個人といったことは、まさにギデンズのいう「モダニティ」の範疇にある〔ギデンズ2005〕。一方で、中途退学をした若者たちが生きる世界は前近代的・伝統的な色彩が濃厚である。UPボードで高等教育まで進学する若者たちは二つの世界の狭間で生きている。インドの近代化は今、グローバル化した世界につながる形で急速に進みつつある。A市の若者の語りは、その近代化が社会の上層から徐々に進んでいることを示しているのだろう。また、英語ボードの若者たちの事例としてみたモダンな生活空間がそれなりの広がりを見せるようになったのは、A市の場合、そう古いことはない。したがって、2006年調査の結果は、近代化の波がようやく北インドの後進州の田舎街にも波及してきたという、現時点でのインドの近代化の進捗度を示しているものとも考えることもできる。

このように解釈すると、事例紹介のなかで示した貧困家族の子どもや親たちの教育への意欲や関心の相対的低さには、パーソナリティやペアレンティングの力量の問題だけでは説明できない、より大きな構造的背景があるといえる。未だ大規模に存在するインフォーマルセクターは、伝統的農業に従事する農民や雑業労働者、その妻として育つ「学のない子ども」に対する一定の社会的な需要を生み出し続けている。また、学校ではなく労働を中心にする育ちは、父母の世代の生き方を踏襲しているという点では、伝統的な枠組みのなかにある「ごく普通」の育ち方ともいえよう。伝統

的な生産のあり方が残存し、そのなかに「労働を通じて育つ」という子どもの育ちが組み込まれている現状のなかでは、中退をめぐる語りには悲壮感がないことも頷ける。

ただし、A市の子どもの育ちの多様性は、序で述べた問題意識に依拠する限り、不平等であることは間違いない。2006年調査の結果は、2001年調査で明らかにした初等教育での子どもの育ちの階層的分化が大人になるまで連続していることを示している。むろん完全に固定的なものではない。早期中退者と「中途半端な高学歴者」の将来はさほど変わらない場合もあるし、UPボードで学びつつも英語ボードの若者と肩を並べ競争をする若者もいる。しかし、豊かな家族の子どもの間には大きな溝がある。サンジープの苦労やUPボードで得た高学歴の軽さは、その溝の深さを示している。2001年調査でみた初等教育の不平等は子どもの育ちのなかで連続と続く育ちの不平等の一断面であったというのが、A市でのフィールドワークのさしあたりの到達点である。小学校は学校教育制度の入り口なので、断面というより起点と呼んだ方がよいかもしれない。

ここで序で示した途上国の育ちの不平等をめぐる研究課題に立ち戻ってみたい。序では、不平等のなかにある子どもの育ちをダイナミックかつリアルに描くことが課題であると述べた。2006年調査の結果からは、先に示したように幼い頃から若者となるまで一貫して不平等が連続する傾向があることが指摘できる。少ない事例に依拠した調査なので一定の制約はあるが、育ちの不平等をダイナミックに描くことはそれなりにできたように思う。また、事例が少ないが故に丁寧な聞き取りが可能となった2006年調査では、A市の育ちの不平等の構造がリアルにみえてきた。育ちの不平等の構造とは、子どもたちの育ちのなかで有利・不利が形成・維持される構造のことなので、貧困（と富裕）の世代的再生産、あるいは社会階級の再生産の構造と言い換えてもよい。

2006年調査の結果からは、家族の資源が子どもの育ちの不平等に関わっているということがみえてきた。少数の事例、また親ではなく若者からの聞き取りという制約はあるにせよ、英語ボードの

事例は豊かな家族、UPボードの事例は庶民家族や貧困家族に概ね位置づけることができる。調査では、異なる階級・階層に位置づく各家族の資源の多寡が、若者のライフコース上の有利・不利に密接に関わっていることがみえてきた。

この点は、先進国をフィールドにした貧困の世代的再生産、社会階級の再生産、社会移動等をめぐる研究の多くが指摘してきたことである。ブルデューの再生産論を下敷きにすると、社会階級の再生産のモメントの鍵を握るとされる家族の三つの資本の違い、具体的にいえば家族が保有する所得や資産などの経済的資本、学歴や教育への意欲などの文化的資本の違いが、調査では観察されたといえる（社会関係上の資本についてはこのたびの調査では多くのことは分からない）[Bourdieu1986]。本稿で焦点をあてている文化的資本の差異についていえば、豊かな家族と庶民家族・貧困家族の間にある大きなギャップが確認できた。そして、両者の育ち、現在の生活、将来展望等は文化的資本の差異に規定されている。さらに、豊かな家族の文化的資本、たとえば、高い学歴、英語能力、能力主義的競争に親和的な構えなどは、彼らの階級的優位性の維持（卓越化）にも関わっている。したがって、家族の文化的資本の差異とは、育ちの不平等そのものであると同時にその再生産の条件でもあり、まさに貧困の世代的再生産の構造の一端がこのたびの調査では確認されたといえるだろう。

このように、A市でも育ちの不平等は家族の資源に規定されているとまずはいえるが、別の条件も考慮する必要があるように思う。調査では、大規模なインフォーマルセクターを抱える労働市場のあり方、そのことと重なりつつ存在する学校を介さない子どもの社会化のパス、コラプションや教育制度のありようなどが、子どもの育ちに影響を与えていることがみえてきた。育ちの不平等の構造を描こうとするならば、これらの条件は家族の資源の範疇には収まらない。家族を取り巻くA市という場の状況（「文脈」）に関わる条件である。この「文脈」は一部の子どもの将来を制約しているという意味で、家族の資源による不平等を助長しているファクターといえる。

こう考えると学校教育制度の問題は深刻である。学校教育制度の理念的な目的の一つは子どもの育ちの条件の平等化であり、インドの学校教育制度もそれを建前の一つとし、就学義務や奨学金を制度化している。しかし、現状ではA市の学校教育制度は家族資源の格差に規定された不平等を助長

しているといわざるを得ない。ただ、このことは裏返せば、学校教育制度改革の余地がきわめて大きいということでもある。2006年調査の結果は、育ちの不平等是正のための制度改革や学校づくりのヒントも数多く示唆しているように思うが、この点については機会をあらためて論じたい。

注

- (1) 近年のインドの都市労働市場の変動については木曾順子の分析が詳しい [木曾2003]。木曾によれば、現在でも都市就業者の70%程度をインフォーマルセクターが吸収しているという。
- (2) 「私立学校」は、Private Unaided School (認可補助無学校) のことを意味する。政府補助を受けるPrivate Aided School (認可補助有学校) もあるが、これは公立学校に準ずる性格の学校であるため除外した。
- (3) 「中間層」の定義ははっきり定まっているわけではない。ここでは「経済発展のなか生まれてきた豊かな層」という程度の意味で使っている。
- (4) U P州のコラプションは中央政府の開発レポートのなかでもU P州開発の障害の一つとしてあげられている [Planning Commission 2007: 398]。しかし、レポートのなかでも述べられているが、コラプションはインフォーマルな事象であり正確な実態は不明である。ただ、自分自身、調査活動に関わって少額

- のゲース (ワイロ) を要求されることはあるし、些細なことでゲースがやり取りされていることは日常的に見聞きする。2007年にパスポートを申請したA市住民の話によると、費用はフォーマルな手数料として約2000ルピー、加えて手続きをスムーズに進めるためのゲースが約5000ルピー (様々な窓口で支払ったものの総額) であったという。コラプションには政治家や官僚による贈収賄も含まれるが、この例のようなトリビアルな場で日常化している「便宜を図ってもらうための手数料」の授受も含まれる。
- (5) このことは初等・中等教育だけに留まらない。たとえば、U P州政府によるボード試験ではゲースによる不正 (カンニングなど) の放置、A市の大学には教員の怠慢やゲースによる学位授与といった問題があると住民は指摘している。コラプションと同様に実態は分からないが、住民の声に依拠する限り、かなりありふれたことのように思われる。

参考文献・論文

- Bourdieu P., 1986 'The Forms of Capital', Richardson J.G. *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, Greenwood, pp241-258
- Deshpande S. 2006 'Exclusive Inequalities: Merit, Caste and Discrimination in Indian Higher Education Today' *Economic and Political Weekly (EPW) Vol.41-24*, pp2438-2443
- ドーア R.P. 1978 『学歴社会 新しい文明病』岩波書店
- Filmer D. and Pritchett L. 1999 'The Effect of Household Wealth on Educational Attainment: Evidence from 35 Countries' *Population and Development Review*, 25(1) pp85-120
- ギデンズ A. 2005 『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社
- 木曾順子, 2003 『インド 開発のなかの労働者』, 日本評論社
- Kingdon G.G. 1996 'Private Schooling in India' *EPW*, 31-51, pp3306-3314
- NSSO 2006 *Status of Education and Vocational Training in India 2004-05, NSS 61st Round*, Govt. of India.
- 押川文子, 1998 『『学校』と階層形成 - デリーを事例に -』, 古賀正則ほか編 『現代インドの展望』, 岩波書店, pp125-148
- Planning Commission 2007 *Uttar Pradesh Development Report Vol.2* Govt. of India
- 佐々木宏/Sasaki H., 2006, 「途上国の貧困と教育 - 教育機会の不平等という論点」, 教育福祉研究, 第12号, pp1-10
- 2004, 'School Choice and Divided Primary Education' *Journal of the Japanese Association for South*

Asian Studies, Vol.16, pp17-39

World Bank 2005, *World Development Report 2006*, Oxford University Press

Upadhy C. 2007 'Employment, Exclusion and 'Merit' in the Indian IT Industry' *EPW Vol.42-20*, pp1863-1868

<英語ボードで学んだ若者>

表3-1

	モナ	カイラーシュ	アシュワニ	ジョン	アルン	ラフル
聞き取り時期	2006 夏	2006 夏	2006 夏	2006 夏	2006 夏	2006 冬
聞き取り言語	英語	英語	英語+ヒンディ	英語	英語	英語
年齢 性別	女 23 歳	男 21 歳	男 24 歳	男 18 歳	男 22 歳	男 22 歳
現在の状況	大学院生	予備校生	予備校生	予備校生	予備校生	予備校生
アルバイトなど	塾講師	なし	なし	なし	なし	家業の手伝い
家庭の状況						
特記事項	家族の出自はバキスタン(祖父の代にA市に来た)、母語はシンド語	A市には祖父が住んでいるが、実家はビハール州にある	幼い頃、父の仕事の関係でカルカッタにいた	家族の出自はケララ州、母語はマラヤラム語、クリスチャン	家族の出自はA市だが、高校までボンベイにいた。	
同居家族人数(本人除く)	8人:父・母・兄+叔父・叔母・いとこ3	0人:実家はビハール(父・母・弟)	6人:祖父・祖母・父・母・姉・妹	2人:父・母	4人:父・母・姉・妹	3人:父・母・妹
父(年齢、学歴、職業など)	52歳、大卒、服飾小売店経営	48歳、大学院卒、中央政府公務員(医学研究所の事務長)	56歳、大卒、NGO病院の事務職	50歳、大学院卒、私立高校教員	49歳、大卒、中央政府公務員(ITエンジニア)	47歳、大学院卒、建設業経営
母(年齢、学歴、職業など)	44歳、前高校卒、主婦	42歳、大卒、主婦	52歳、大卒、主婦	48歳、大学院卒、私立小学校教員	43歳、前高校卒、主婦	45歳、大卒、主婦
兄弟(学歴、職業など)※非同居も含めて	兄(大卒、旅行会社勤務)	弟(後高校生)	姉(大学院卒、フィットネスクラブ栄養士)、妹(大学生)		姉(大学院卒、銀行・保険会社職員)、妹(医学部学生)	妹(大学院卒、私立英語ボード高校の教員)
家族の英語能力	全員堪能	全員堪能	祖父と父は堪能	全員堪能	全員堪能	全員堪能
家族の経済活動	大きな服飾小売店	なし		なし	なし	建設業経営。公共工事の請負をしている。
家族の保有財: 携帯電話とバイクについては若者本人のモノについて。カイラーシュについてはビハールの実家の状況	持ち家	有	有	有	有	有
	自家用車	有	有	有	無	有
	エアコン	無	有	有	有	有
	発電機	無	無	無	有	無
	バッテリー	有	有	有	有	有
	テレビ	有	有	有	有	有
	冷蔵庫	有	有	有	有	有
	有線電話	無(父などの携帯電話)	有	有	有	有
	パソコン	有	有	有	有	有
携帯電話	無	無	無	無	有	
バイク	無	無	有	有	有	

表3-2

就学前	小学校(Class1-5)	中学校(Class6-8)	高校(Class9-10)	高校(Class11-12)	大学	大学院など
モナ	英語私立			A市の大学	バラナシの MBA 通学中	
修了試験成績		ICSE: 56%	ISC: 58%			
カイラージュ	英語私立:ピハール農村部		英語私立※Class8 から	MP 州の大学	MBA 入試予備校通学中	
修了試験成績		CBSE: 76%	CBSE: 68%			
アシュワニ	英語私立:カルカッタ	英語私立	英語私立	A市の大学	TOEFL 予備校通学中	
修了試験成績		ICSE :52%	CBSE: 54%			
ジョン	英語私立		英語私立 ※Class10 から	IT 入試のため予備校通学中		
修了試験成績		ICSE: 86%	CBSE: 82%			
アルン	英語私立:ボンベイ			A市の大学	MBA 入試予備校通学中	
修了試験成績		MH ボード: 58%	MH ボード: 64%			
ラフール	英語私立	英語私立※Class7 から		A市の大学	MBA 入試予備校通学中	
修了試験成績		ICSE: 63%	ISC: 74%			

注) 「英語私立」とは英語を教授語にする私立学校、「ヒンディ私立」とはヒンディ語を教授語にする私立学校を意味する。高校までの学校で地名が付記してあるものは、A市以外の場所にあった学校である。その他はすべてA市の学校である。終了試験の「MH ボード」はマハラシュトラ州の英語ボードである。「MP 州」はマディヤプラデシュ州を指す。

表3-3

モナ		ジョン	
平日	日曜日	平日	日曜日
5:00		5:00	5:00
6:00	6:00 起床 ヨガ、水浴び、 プージャ	6:00	5:30 起床水浴 食事 6:00~7:30 勉強
7:00		7:00	7:00
8:00	8:00~11:30 大学院で授業を受ける	8:00	7:30 家を出る 8:00~11:00 予備校で IT 入試のための授業 を受ける
9:00		9:00	8:00 起床水浴 食事
10:00		10:00	9:00~11:00 テレビで映画を見る
11:00		11:00	10:00
12:00	12:00 帰宅 食事、家事	12:00	11:00
13:00		13:00	12:00~14:00 TOEFL 予備校で自習 12:30 帰宅後 食事
14:00		14:00	13:00~14:00 休憩、屋敷
15:00		14:00	14:00~16:00 勉強
16:00	16:00~20:00 自宅で塾	15:00	14:00~17:00 勉強
17:00		16:00	15:00
18:00		17:00	16:00~18:00 勉強
19:00		18:00	16:00~自室で音楽を聴く 16:30~18:00 勉強
20:00	20:00~ テレビ 食事	19:00	17:00
21:00		20:00	17:30~ 家族で教会に行く
22:00	22:00 就寝	21:00	19:00~ 自宅で 家族とくつろぐ
		22:00	20:00~ 父と散歩 (勉強の気晴らしに)
		23:00	20:30~21:30 勉強
		23:30	21:30~ 食事、テレ ビ、入試勉強以外 の本などを読む
			22:00
			23:30 就寝

＜早期に中退した若者＞

表4-1

	アニール	プラターブ	カマラ	サンギータ	サンジャエ
聞き取り時期	2006 夏	2006 冬	2006 冬	2006 冬	2006 冬
聞き取り言語	ヒンディ	ヒンディ	ヒンディ	ヒンディ	ヒンディ
年齢 性別	男 20 歳	男 18 歳	女 推定 18 歳前後	女 推定 18 歳前後	男 23 歳
現在の状況	サリー工房労働者	ピターイー労働者	家事・内職	家業(花・マールラー作り)・家事	ピターイー労働者
特記事項	既婚		既婚(近々同居)	ヒンディ語も非識字	
家庭の状況					
同居家族人数(本人除く)	7人:父・母・弟・弟・弟 +妻・子	8人:父・母・兄+妻 子・妹・妹・弟	6人:父・母・妹・弟・ 弟・妹	7人:父・母・兄・妹・弟・弟	7人:父・母・弟・弟・妹・妹
父(年齢、学歴、職業など)	45 歳、小学卒、無職	45 歳、不就学、農業	37 歳、小学卒、ピター イー労働者	不明、50 歳前後、3 年生まで、農 業	55 歳、不就学、ミストリー(建築開 連の職人)
母(年齢、学歴、職業など)	40 歳、未就学、主婦	40 歳、不就学、主婦	35 歳、不就学、主婦、 農業	不明、不就学、主婦	45 歳、不就学、主婦、足痛
兄弟(学歴、職業など)※非同居も 含めて	弟(中学中退、サリー工 房・雇用労働)、弟(小学 生)、弟(小学生)、妻(中 学卒、主婦)、子(1 歳) ※非同居:姉他家に嫁 入り)	兄(中学卒、ピターイー 労働者)、妹(中学卒、裁 縫学校)、妹(7 年生)、弟 (政府の幼稚園)	妹(9 年生、財布作内 職)、弟(7 年生)、弟(5 年 生)、妹(4 年生)	兄(3 年生まで、ピターイー労働 者)、兄(後高校卒・大学中退、家 業)、妹(4 年生まで、家業)、弟(幼 稚園)、弟(6 歳) ※非同居:姉(2 年生まで、小作農)、兄(5 年生ま で、ピターイー労働者)	弟(中学卒、ピターイー労働者)、 弟(前高校卒、携帯電話の電波塔 番人)、弟(4 年生)、妹(6 年生)、妹 (1 年生)※非同居:姉(不就学、主 婦)、姉(不就学、主婦)
家族の英語能力	なし	なし	なし	なし	なし
家族の経済活動(自営の家業)	なし	農業(農地は 0.4ha)	農業(農地は 0.014ha)	農業(農地は 0.25ha 程度)	農業(農地は 0.11ha)
家族の保有財:携 帯電話とバイク については若者 本人のモノにつ いて	持ち家	有	有	有	有(きわめて小さい)
	自家用車	無	無	無	無
	エアコン	無	無	無	無
	発電機	無	無	無	無
	バッテリー	無	無	無	無
	テレビ	無	有	有	有
	冷蔵庫	無	無	無	無
	有線電話	無	無	無	無(兄がモバイル所有)
	パソコン	無	無	無	無
	携帯電話	無	無	無	無
バイク	無	無	無	無	

表 4-2

就学前	小学校(Class1-5)	中学校(Class6-8)	学卒後	現在の職業
アニール	ヒンディ私立	ヒンディ私立	サリー工房労働者	サリー工房労働者
プラターブ	公立	ヒンディ私立	ビターイー労働者。短期間、バイク修理の徒弟をした	ビターイー労働者
カマラ	ヒンディ私立	ヒンディ私立	家事手伝い・内職 半年ほど職業学校に通った	家事手伝い・内職
サンギータ	ヒンディ私立		家業・家事手伝い	家業・家事手伝い
サンジャエ	ヒンディ私立		4年生の頃に徒単となり、その後、ビターイー労働者として働く	ビターイー労働者

表 4-3

アニール		サンギータ	
	平日		日曜日
5:00	5:00 起床 散歩、水浴び、食事	5:00	5:00 起床 散歩、水浴び、食事
6:00		6:00	
7:00		7:00	
8:00		8:00	
9:00	9:00~14:00(通常は17:00まで) サリー工房で仕事	9:00	9:00~ 友人の家に行く。 時間を潰しに、話をしに。
10:00		10:00	
11:00		11:00	
12:00		12:00	
13:00		13:00	13:00~ 街に出かける (映画を見に)
14:00	家で休む。昼寝	14:00	
15:00		15:00	15:00~18:00 映画館で映画
16:00		16:00	
17:00		17:00	
18:00	18:00~20:00 バザールで友人 に会う。「もっと良い仕事はない のか？」などと話をする	18:00	18:30~ 近所のバザール のお店に行って時間潰 し。テレビ映画を見る
19:00		19:00	
20:00	20:00 過ぎ 帰宅 食事	20:00	
21:00	21:00 就寝	21:00	21:30 帰宅 食事
22:00		22:00	23:00 就寝
		5:00	5:00 起床
		6:00	6:00 牛の世話、洗濯、掃除
		7:00	7:00 牛の世話、洗濯、掃除
		8:00	8:00 8:00~16:00 マーラー作り、 家の仕事、食事などいろいろ。 マーラー作りの時に針 で指を怪我した。普通なら 夜もマーラー作りをする が、昨日は怪我のためや めた。
		9:00	9:00~16:00 マーラー作り、家 の仕事、食事などいろいろ。
		10:00	10:00
		11:00	11:00
		12:00	12:00
		13:00	13:00
		14:00	14:00
		15:00	15:00
		16:00	16:00 食事
		17:00	17:00~18:00 家の畑で花 の収穫。
		18:00	18:00 17:00~18:00 家の畑で花の 収穫
		19:00	19:00 18:00 火をおこす(暖房用)
		20:00	20:00~マーラー作り
		21:00	21:00 就寝
		22:00	22:00

<UPボードで学び高等教育まで進学した若者>

表5-1

	アショーク	プリヤ	ブラカーシュ	スレーシュ	サンジーブ
聞き取り時期	2006 夏	2006 夏	2006 夏	2006 夏	2006 冬
聞き取り言語	ヒンディ+英語少々	ヒンディ	ヒンディ	ヒンディ	英語+ヒンディ
年齢 性別	男 17 歳	女 23 歳	男 22 歳	男 20 歳	男 24 歳
現在の状況	大学生	私立小学校教員	民間pc スクール・イン ストラクター	大学生	予備校生
アルバイトなど	小口貯金の集金・牛の 世話・牛乳売り	マールー作り・家事	なし	藝師	なし
家庭の状況					
特記事項				指定カースト	
同居家族人数(本人除く)	1人:母	9人:父・母・兄家族兄・妻・ 子3人・姉・弟	6人:父・母・兄・弟・弟・ 妹	7人:祖母・父・母・姉・弟・ 弟・弟	3人:父・母・妹
父(年齢、学歴、職業など)	15年前死亡	70歳、小学卒、農業	42歳、大卒、農業	42歳、大卒、私立学校教 員	44歳、後高校卒、保険会 社のエージェン
母(年齢、学歴、職業など)	47歳、小学卒、農業・雑 雇用	60歳くらい、小学中退、主婦	45歳、中学卒、主婦	36歳、未就学、主婦	44歳、前高校卒、保険会 社のエージェン
兄弟(学歴、職業など)※非同居も含 めて	※非同居:兄前高校 卒、長距離トラックドラ イバー)	兄前高校卒、サリー工房・ 雇用労働、姉大卒、公立学 校教員、弟(大学生) ※非 同居:兄(在、ボンベイ、前高 校卒、テンプードライバー)	兄(後高校卒、雑貨屋自 営)、弟(大学生)、弟(前 高校生)、妹(前高校生)	姉(大学生)、弟(後高校 生)、弟(前高校生)、弟(前 高校生) ※非同居:姉(大 卒、他家に嫁入り)	妹(大学通学中) ※非同 居:姉(大学院卒、主婦)
家族の英語能力	なし	なし	なし	父が若干使える	姉のみ、堪能。
家族の経済活動(自営の家業)	農業(牛飼、花作り)	農業(農地は0.14ha)	農業(農地は0.5ha)、雑 貨屋(主に兄の仕事)	農業(農地は0.25ha、主に 祖母の仕事)、衣類店	なし
家族の保有財: 携帯電話とバイ クについては 若者本人のモノ について	持ち家	有	有	有	有
	自家用車	無	無	無	無
	エアコン	無	無	無	無
	発電機	無	無	無	無
	バッテリー	有	有	有	無
	テレビ	有	無	?	?
	冷蔵庫	無	無	無	無
	有線電話	無	無(弟の携帯電話)	無(携帯電話)	無
	パソコン	有	無	無	無
	モバイル	無	無	有	無
バイク	無	無	無	無	

表5-2

就学前	小学校(Class1-5)	中学校(Class6-8)	高校(Class9-10)	高校(Class11-12)	大学	大学院	現在の職業
アシヨーク	ヒンディ私立	英語私立	ヒンディ私立		A市の大学通学中		
			修了試験成績	UPボード:?	UPボード:62%		
ブリヤ	ヒンディ私立	ヒンディ私立		ヒンディ私立	ヒンディ私立	A市の女子大学	私立学校教員
			修了試験成績	UPボード:49%	UPボード:61%		
ブラカーシュ	ヒンディ私立	ヒンディ私立		A市の大学			民間PCセンターインストラクター
			修了試験成績	UPボード:?	UPボード:45%		
スレーシュ	ヒンディ私立		ヒンディ私立	ヒンディ私立	ヒンディ私立	A市の大学通学中	
			修了試験成績	UPボード:63%	UPボード:74%		
サンジープ	ヒンディ私立		ヒンディ私立		A市の大学	MBA入試予備校通学中	
			修了試験成績	UPボード:62%	UPボード:58%		

表5-3

スレーシュ		ブリヤ	
	平日		平日
4:00	起床 水汲み、父の出勤準備(服の用意、自転車の整備など)	4:00	起床 水汲み、自分の衣類の洗濯、食事
5:00		5:00	
6:00	6:00~ 勉強(数学)	6:00	
7:00	7:30~ 食事	7:00	7:00~ 食事の準備
8:00	8:00~9:00 休憩、昼寝	8:00	8:00~11:30 学校で仕事:この日は雨のため30分始業が遅れる。また、帰りも雨で、しばらく学校で雨宿りをして帰る。
9:00	9:00~10:00 自分の身だしなみ、家の掃除	9:00	
10:00	10:00~午後の塾の準備	10:00	
11:00	11:00~ 勉強	11:00	11:00~ 休憩、昼寝
12:00		12:00	12:00~ 食事
13:00	13:00~ 食事、家のお店の開店準備	13:00	13:00~15:00 勉強(苦手の物理など)
14:00	13:30~ 弟に勉強を教える	14:00	
15:00	15:00~18:00 塾(自宅で開始。1時間1クラス×3(一クラス生徒は3-4人)	15:00	15:00~ 弟に勉強を教える
16:00		16:00	16:00~TVで映画を見る
17:00		17:00	17:00~18:00 勉強
18:00	18:30~ 姉の薬を買いにでかける	18:00	
19:00		19:00	19:00~ 食事の準備
20:00	19:30~ 帰宅後テレビをみる	20:00	19:30~ 母にマッサージをし、いろいろと話をする。
21:00	食事、勉強、弟に勉強を教える	21:00	21:30~ 食事
22:00	21:00 店じまい	22:00	22:00 就寝
23:00	23:00 就寝	23:00	23:00 就寝